『社会科学ジャーナル』40〔1999〕
The Journal of Social Science 40〔1999〕

ジェンダーとコスモロジー

パプアニューギニア・フォイ族のセクシュアリティ・空間・儀礼

槌谷智子

1．序

本論は，パプアニューギニアの南部高地州のムビ川流域に広がる熱帯雨林地帯に居住する「フォイ」と呼ばれる人々の間で行った現地調査で得たデータに基づいて[1]，ジェンダーという側面からフォイのコスモロジーを考察するものである。

パプアニューギニアの他の多くの地域と同様に，フォイ社会にも，男女の明確な役割分担と，女性の月経血や産血に対するタブーがある。女性は月経期間と出産・産後の一定期間は特別な空間で過ごす。また，日常生活においても，男女は別々の住居に暮らしている。

これまでパプアニューギニアでは，ジェンダーと経血のケガレについてさまざまな議論がなされてきた。特にパプアニューギニア高地は，男女の反目（antagonism）が顕著な地域として注目を集めてきた。高地社会の多くでは，経血は男性にとって危険なものとされており，従って女性はケガレた存在として男性から空間的に隔離されている，と論じられてきた［Langness, 1967，Meggitt, 1964，Sillitoe, 1979］。一方，近年より緻密な民族誌のデータの集積によって，ケガレと位置づけられるものの多様性と，ケガレとされるものが必ずしも女性だけに結びつかないこと，ケガレとされるものが同時に肯定的に見なされることもある点などが指摘されている［例えばFaithern, 1975, Buckley, and Gottlieb, 1988，Meigs, 1978, 1984, 1990］。

フォイにおいても，病気をもたらすと見なされているのは必ずしも経血ばかりではない。女性の性交時の膣からの分泌液（性液）と精液が混合したものが病気をもたらすと考えられており，性交した男性にもさまざまな

タブーが課せられる。

フォイの生殖観念では，子宮内で女性の性液，女性の血，男性の精液によって胎児の身体が構成され[2]，経血は子供を作るために使われなかった悪い血なので危険な力を持つと説明される。フォイの経血に対する恐れの観念は，生殖観念と関連しているのである。

本論では，従来のケガレの議論を一歩進め，フォイの経血に対する観念を，ケガレという狭い枠組みではなく，ジェンダー，性，生殖観念，神話との関連というより広い観点から分析し，コスモロジーとの関連を明らかにすることを目的とする。そのために，ジェンダーやセクシュアリティにかかわる表象や語りを分析する。ミッショナリーの影響によって，現在は行われなくなった儀礼の中にも女性が象徴的に表象されているものがある。現地調査で得たデータをもとに，現在ばかりではなく，過去に行われていた治療儀礼と秘儀もとりあげ，ジェンダーと空間，セクシュアリティ，神話，儀礼の連関性からフォイのコスモロジーを理解することを試みる。

論文の構成としては，第2節で男女の分業，男女と住居や方位の規定，さらに生と死の観念とジェンダーとの関連をとりあげ，第3節で経血と産血が病気をもたらすという観念と，フォイの生殖観念を伝える男女の創世神話を記述する。第4節で性交とさまざまなタブーについて記述し，女性ばかりでなく性交した男性も災厄をもたらす存在と見なされることがあるということを明らかにする。第5節では，かつて行われていた二つの治療儀礼の中に見られるジェンダーを記述する。第6節では，かつて行われていたアヤ儀礼をとりあげる。最後にこれらのデータから，フォイのジェンダーとコスモロジーとの関係を考察する。

2．ジェンダーと空間

一般的に，フォイ族の男女の分業は次のようになっている。女性の仕事は，主食となるサゴヤシのデンプンの採集，バスケットや網袋や樹皮布作

り，乳幼児と子豚の世話，農作物の植え付け，畑の草取りなどである。男性の仕事は，家やカヌー作り，畑の開墾のためにブッシュを切り開く作業，犬を連れての狩猟や獲物の罠作りなどである。川魚や小動物の捕獲は男女とも行うが，使用する道具は異なる。料理は主に女性の仕事だが，豚・ヒクイ鳥・大型ヘビなど，大きな獲物を石蒸し料理にするのは男性の仕事である。

男性達の共同住居であるロングハウスは，川のほとりに川の流れと平行に建てられ，川上と川下に各一つ出入口がある。ロングハウスの両側面には女性と子供のための住居が建っている（図１参照）。例外もあるが原則的に父方・夫方居住であり，ロングハウス・コミュニティは，複数の地縁化された父系クランによって構成されている。ロングハウスへの女性の立ち入りは禁じられている[3]。男性は妻の家に自由に出入りし，食事を共にすることもあるが，夜眠るときにはロングハウスに戻る[4]。狩や豚の飼育，畑仕事，サゴヤシのデンプン採集などの便宜のために，家族単位で出作り小屋に滞在することも多いが，出作り小屋の内部は男女の空間に分離されている。もし，男性が寝ている時に，女性がそのまわりを歩き回ると，男性は咳がでて病気になると考えられているからである。女性が男性の食べる物を跨ぐことはタブーである。もし男性がそれを食べれば病気になると言われている。女性が姦通した後，食べ物の上を跨いで，それを夫に食べさせれば，夫は死ぬと考えられている。

女性は，月経中と出産時・産後は月経小屋に篭もらなければならない。月経小屋は，女性の家の背後，ブッシュ側に作られる（図１参照）。男性は月経小屋に近づくことは禁じられている。

男女の区分は居住空間の分離ばかりではない。方位においても男女は規定されている[5]。月経小屋は，川下の側に一ヶ所だけ出入口が作られる。出作り小屋では，川上に男性の寝床，川下に女性の寝床が作られる。この理由は，女性の身体の中で精液と女性の性液（カゴ・アウ）が混じりあっていて，夜眠っている間に熱くなり，蒸気となって身体の外に出てきて，男

性がそれを浴びると病気になってしまうため，男性は風上の川上に寝るのだと説明される。

ロングハウスの二つの出入口には，治療儀礼で使用されたボトと呼ばれる道具が飾られている（この治療儀礼については第5節で記述する）。ボトには男と女のボトがあり，男のボトが飾られている川上側は男の入り口，女のボトが飾られている川下側は女の入り口と呼ばれる（図2参照）。

さらに，生と死に関連した方位の観念がある。フォイでは，人間は二種類の霊魂，イ・ホー（目の中にいる霊魂）と[6]，ナメゲ・ホー（心臓に宿る霊魂）を持っていると信じられている。イ・ホーは死ぬ間際に，赤ん坊の時，大泉門のあった所から抜け出ていくと考えられている。赤ん坊が母親の身体から出るように抜け出て行くので，女性が病人の頭の側に座ることは禁じられている。イ・ホーが上手く出られなくなるからであると言う。祖先のイ・ホーは，自分のクランの土地の洞窟や川の渦巻などに暮らすと考えられている。ナメゲ・ホーは，死後に身体から離脱して川を下り，死霊の暮らす海岸へ行くと信じられている。

遺体は，ロングハウスの通路の中央に安置され，葬礼が行われる。女性達は死者の回りに一晩中付き添い，悲歌（ケメ）を歌う[7]。葬礼で中心的な役割を果たすのは女性である。遺体の頭は川上に，足は川下の方角に置かれる[8]。この理由を，あるインフォーマントは，赤ん坊は女性の身体から頭から生まれるからだと説明する。

このように，川下は象徴的に死と結びついた方角であると同時に，女性と結びつけられ，一方，川上は男性と象徴的に結びつけられている。

3．月経血と生殖概念

月経中の女性は，誰にも姿を見られないようにして過ごす。トイレに行くときも男性に姿を見られてはならない。食事は他の女性が持ってきてくれる。月経小屋の中で，ティリファと呼ばれるヤシの仏炎苞（種子を包む大形のさやで，器などに用いる）の上に座り，経血が外にもれないように

する。経血の量が多い場合には，その上に樹皮布の古いものを置いて吸わせる。眠る時もこの上に眠り，這って歩き，月経が終わるとティリファに包んだ経血をブッシュの奥の穴に持って行って埋める[9]。その後，川で水浴びをしてから家に帰り，1～2日間は料理したものを夫に与えることはできない。

もしも経血に触れたり，経血のついた物を食べたら，男性ばかりでなく女性も病気になり死んでしまうと考えられているので，女性は自分の経血も注意して扱わなくてはならない。実際に自分の経血に誤って触れてしまったために死んだ女性がいるという事例を聞いた。経血の力は強力で，咳がでて，膝・腰・背骨・肘が痛くなる病気にかかると考えられている。病人はやがて歩けなくなり，死に至るとされている。経血によって病気になった人はドロバゲ（皮膚がただれ歩けない人）と呼ばれる。なぜ経血が病気をもたらすのかについて，あるインフォーマントは，経血は精液と混じって子供を作るために使われなかった悪い血なので毒であると説明する。

経血ばかりでなく，産血も病をもたらすものと捉えられている。出産は月経小屋で行い，子供の父親でも近寄ることは禁じられている。後産が終わるとへその緒は竹製のナイフで切られ，血液と胎盤は埋められる。これらは，注意深く火ばさみではさんで埋められる。赤ん坊も血がついているので，直接触らないように樹皮布にくるんで母親が洗う。その後，母親は出血が止まるまで月経小屋に滞在する[10]。

産血と胎盤について，ある老女はこう説明する。「良い血は赤ん坊を育てるために使われ，使えない悪い血が残る。赤ん坊が塞いでいるので悪い血はそこに留まり，出産時に赤ん坊がスムーズに出るのを助ける。悪い血は危険なので埋める。胎盤も赤ん坊の身体を作るために使われなかったので危険である」。

血と肉は女性の血から，骨と歯は男性の精液から作られるというニューギニア地域で広く知られる生殖観念をフォイも持っている。妊娠初期の頃に，激しい労働をしたり転んだりすると，血と精液が胎児の身体を形成す

る前に混じりあって流れ出てしまうと言われる。

フォイに伝わる男女の創世神話の中で，女性と赤い血や肉，男性と白い歯，爪，骨との関連が説明されている[40]。この神話は，かつては結婚する時に長老から新郎に伝えられたが，キリスト教の影響によって語られなくなったため，現在は年配者しか知らない。性器にまつわる話なので男性しか知らされなかったと，ある長老は言う。別の長老は「この話しでわかるように，女性の身体の中に入った石の先が転がるので，月経血が出るのだ」と，この神話が月経の由来を説明するものだと話した。

＜男女の創世神話＞

かつてまだ人間の男女になる前の生物が２匹いた。これらは目・鼻・口はあったものの，手・足・指が分節していなかったため，棒のようで身体を曲げる事ができなかった。１匹が毎日どこかへ出かけて行くので，もう１匹がある日こっそり後をつけると，つるつるしたタコノキの上に登っては滑り降り，登っては滑り降りと何度もくり返していた。それで，後をつけた方がこっそり木の上に鋭く削った石をくくりつけておくと，木から滑り降りた生物の首から下がまっぷたつに切れ，赤い液体が一面に流れ出した。動物達がやってきてその赤い液体に身体を浸すことによってその時血を獲得した。石を置いた方の生物がいろいろな赤い植物を集めてきて身体に巻くと，傷がくっつき，足ができ，手もできた。しかし，股の下の傷はくっつかず，人間の女性になった。その女性は腰簑をつけ始め，腰簑の一房を抜いて相手の股に結び付けた。ある日，女性が家の下に物を落としたので拾ってくれるように相手に頼んだ。床下に降りて探しても見つからず，どこにあるのかと問うと，女性は上を見上げるようにと言った。上を見上げると，床の隙間から女性が股を広げ座っているのが見えた。そして，二人は性交しようとしたが，腰簑製のペニスが膣の中にあった鋭い石の為に入れず，ペニスは壊れて白い液体が流れ出た。女性が白い植物

をペニスに巻き付けると傷は治ったが，先端はくっつかず隙間があいた。その生物は男性になった。二人は結婚し，たくさんの子どもを産み，さらに子供同士が結婚した。最初の男女の子どもがわれわれ（パプアニューギニア人）になり，最後の二人が白人になった。赤いものである血と肉は女性から生み出され，白いものである歯・爪・骨は男性から生み出された。

母親の血から子供の血や肉が作られると考えられているため，血液と皮膚は母系的なつながりを持つことになる。それが顕著に表れているのは，母方オジや母方オバが怒ると，オイ・メイは皮膚がただれ，頭痛と熱を伴う病気になると考えられていることである。その理由は，母親のキョウダイ（sibling）と姉妹の子供とは同じ肉と血を共有するからだと説明される。人間は怒ると血が熱くなり，人を病気にしたり殺したりする事があると考えられている。熱くなった血が人間の形となって，人を攻撃すると説明するインフォーマントもいるし，怒っている人の祖先のイ・ホー（霊）が代わって攻撃すると説明するインフォーマントもいる。いずれにしても，人間が怒ると血が熱く（ハマギ・シシブ）なり，その結果病気が引き起こされるので，血を共有する母親のキョウダイを怒らせることは危険なことであると言われる。もしも，婚資などの財貨の贈与を妻のキョウダイに対して十分にしないと，子供が病気になる危険があると恐れられている[02]。

4．性交とタブー

多くのニューギニア社会と同様に，フォイ社会でも性交を頻繁にするのはよくないことだと考えられている[03]。性交は夫婦で昼間ブッシュへ仕事に出かけた時に行われる。結婚前の性行為，配偶者以外との性交は禁じられているが，しばしば姦通事件が起こる。

月経後数日間，性交は行われない。妊娠すると性交することは禁じられる。もし，妊娠中に性交すると，双子が生まれたり，健康な子供が生まれ

ないと考えられている。出産後は，子どもが這うようになるか歯が生えるまでは性交するべきではないと言われている。

女性はサゴヤシのデンプンを採集するとき，削ったサゴヤシの髄を足で踏む作業をするので，その前に性交してはならないとされている。男性は，畑を作る時，性交を禁じられている。さもないと，作物がよく育たないと言われる。狩に行く時も，性交すると，匂いで獲物が逃げてしまうと言われる。ロングハウスを作る時，大きなカヌーを作る時，祭礼を行う時，豚を殺す時もタブーである。祭礼では，ホスト側の男性達は多数の豚を用意して石蒸し料理にし，招かれた男性達は一晩中歌をうたったり，太鼓を叩きながらロングハウスの中を往来する[14]。性交すると，怠惰になって準備のために十分に働かなくなったり，豚を解体する時に豚肉が腐ってしまったり，太鼓を叩くと皮が破けてしまうと言われている。あるインフォーマントは，性交した直後の男性がロングハウスの中を踊りながら往来することは好ましくないと語る。男性が財貨を得るために他のロングハウス・コミュニティに出かける時も，性交すると財貨を得られないと言われる。また，ロングハウス・コミュニティに悪い病気が流行すると，性交は慎まなくてはならない。

性交をした男女は病人の見舞いに行く事を禁じられている。もしそうしたならば病人は悪化して死んでしまうだろうと考えられているからである。性交をした後，男性の精液と女性の性液の混じりあった物質が，蒸気とも匂いともつかないようなものとなって立ち昇ると言われ，それが病気を悪化させると考えられている。病人の世話は未婚者か老人がするべきだと考えられていて，看護する者は性交してはならない。男性は重病になると夫のいる女性や自分の妻の作った料理は食べない。隔離された小屋で，看護をする男性の作った食事を取る。

性交した後，赤ん坊に近づくと，赤ん坊が病気になると考えられている。また，性交した直後の夫婦が与えた食べ物を乳児の母親は食べてはならない。

かつて集団間の戦争が盛んに行われていた時[15]には，戦いに行く前に性交してはならないとされていた。さもないと，敵に殺されることになると考えられていたからである。また，妻が妊娠している男性は戦いに行かなかったと言う。行けば，逃げ遅れて殺されてしまうと考えられていたためである。

5．治療儀礼とジェンダー

フォイ族の居住地域では，１９５０年代からキリスト教が布教され，治療儀礼の遂行が宣教師によって禁じられたためしだいに行われなくなったが，それ以前にはさまざまな治療儀礼が行われていた。通常，儀礼は男性によって行われるが，治療儀礼の中で「女性」が象徴的に扱われるのが，「クイ・ウサネ」と「イ・ウサネ」と呼ばれる二つの儀礼である。ウサネとは太鼓を使用した儀礼・祭礼の意味で，クイはサゴヤシ，イは行くことを禁じられた土地という意味である。

5－1．クイ・ウサネ（サゴヤシの治療儀礼）

咳が出て，喉や胸を煩う病気にかかり，その原因はサゴヤシの生えている場所に出かけたためだと考えられる場合[16]，セゲナボと呼ばれる葉に「クイ呪文」[17]を唱えてからその葉で病人をこする治療や，蒸気による治療などをして看護するが，それでも回復しない場合には，「クイ・ウサネ」を行う[18]。

「クイ呪文」

bari serera Hubi kuio	フビ・サゴヤシの霊よ
bari serera Honamo kuio	ホナモ・サゴヤシの霊よ
bari serera Hoyare kuio	ホヤレ・サゴヤシの霊よ
bari serera Karagu kuio	カラグ・サゴヤシの霊よ
bari serera Fai kuio	ファイ・サゴヤシの霊よ

bari serera Kairai kuio　　カイライ・サゴヤシの霊よ

呪文の三語目に，病人がブッシュへ行ったときに通ったサゴヤシの名前を次々に呼ぶ。サゴヤシの精霊（ホー）がとりついて病気になったので，その精霊を取り除く呪文だと言われている。

クイ・ウサネでは，ボトと呼ばれるサゴヤシの皮で作った小さな盾のような道具を使用する。ボトには二種類の形があり，バルという男のボト，アゴテゲという女のボトがある（図３参照）。儀礼のために，各二枚ずつ計四枚が用意される。

病人をロングハウスに入れる前に，蒸気による治療（イリ・カゴ・カラブ）を行う。ファイ・サゴヤシの根と皮と，このファイ・サゴヤシの回りに落ちている葉を取ってきて，焼いた石の上に置いて水をかけ，その上に病人を座らせて樹皮布でおおいをし，蒸気を浴びせる。ファイは食べられない種類のサゴヤシであり，近寄ると病気にかかると言われている。この治療の時，次のような呪文を唱える（［　］内は筆者が補足）。

ya Kibi kuio tetamero	サゴヤシにいるキビ鳥よ， 飛び立て（病気よ外に出ろ）
ya Siaro kuio tetamero	サゴヤシにいるシアロ鳥よ，飛び立て
kui Forare kuio tetamero	フォラレ・サゴヤシの実よ， ［地面に落ちて］跳ね上がれ （病気よ外に出ろ）
kui Tetamenu kuio tetamero	テタメヌ・サゴヤシの実よ，跳ね上がれ
kui Hoyare kuio tetamero	ホヤレ・サゴヤシの実よ，跳ね上がれ
ira Wariya kuio tetamero	ワリヤの木の実よ，跳ね上がれ

その後，病人をロングハウスに運び入れ，中央の炉の横に寝かせる。病人が男性ならば，病人の回りには男性達が座り，通路を隔てた反対側に女

性達が座る。一人の男性が，ボトを付けたフォナの木の棒を口にくわえ，太鼓を叩きながら，ロングハウス内の通路を首を振りながらジグザグに前進・後進し（図2参照），病人の前でボトを落とす。この時使用される太鼓は，ファレという名前の男太鼓と呼ばれるものである（図4参照）。ボトを口にくわえさせる役割は，病人の看護をしている男性が行う。初めはバルを落とし，次にもう一度アゴテゲで同じことを繰り返す。この時女性達は「イー」という声を唱和する。これは，あるインフォーマントによれば，サゴヤシの回りで甲虫が飛び回る様子を模しているという。この間，病人はセゲナボの葉で患部をこすってもらう。落とされたボトは他の人によってロングハウスの外に運び出される。

一方，複数の男性達が列を成してロングハウスの周りを太鼓を叩きながら回り，ボトを使用した儀礼が終わるのを待ってロングハウスに入り，一晩中太鼓を叩き続ける。何組かに分かれて隊列を作り，各隊列はファレ（男太鼓）かドエブ（女太鼓）のどちらかの太鼓を叩く（図4参照）。男太鼓のファレは成人男性が，女太鼓のドエブは若い未婚の男性が叩く[19]。

真夜中になると一時中断して食事が振る舞われ，新たなバルとアゴテゲを使って同じ治療の行為が繰り返される。そして，サゴヤシの葉の中助に白いオウム（ジャゴ）の羽[20]を刺したものを病人の身体の回りに振りかざす。その後，再び隊列は太鼓を夜明けまで叩き続け，夜明けと共に太鼓の叩き手達はロングハウスから退場し，病人も運び出される。

もし病人が二人いれば，二人の男性がボトをくわえて同時に一連の行為を行う。もし，病人が男女であれば，男性を川上に，女性を川下に寝かせる。

この儀礼が終わると，バルはロングハウスの川上側の出入り口に，アゴテゲは川下側の出入り口に飾られる[21]。

5－2．イ・ウサネ（禁忌の地の治療儀礼）

各クランは自分の土地の中に，行くことを禁じられた場所「イ」を持っ

ている。イには祖霊（アメナ・イ・ホー）が住んでいると考えられている。祖霊は時にはヘビ，トカゲ，アリなどに姿を変える。イに行くと，イに住む祖霊がその人のイ・ホー（目の中の霊魂）を連れ去り，イに生えているモマボ（木に寄生するラン科植物）の中に閉じこめてしまうために病気になると言われる。この病気（イ・レモ・フボラ）になると，よだれが垂れ，身体が震え，目の色が変わり，判断力を失い，狂人のようになる。

この治療として，「イ呪文」をセゲナボの葉に唱えてから葉で病人の身体をこする。呪文の意味は，イにいる動植物が病人のイ・ホーを返すことを妨げているので，それを取り除こうということである。

「イ呪文」

momabo i kukuo	イのモマボを壊せ
ibaru i hihio	イのヘビよ，どけ
Bio i kukuo	イのビオの木を倒せ
ira Homonowage i kukuo	イのホモノワゲの木を倒せ
ira Doakirugo i kukuo	イのドアキルゴの木を倒せ
kasia koa i hihio	イのアリの巣を壊せ

それでも回復しないと，イへ行ってモマボを取ってきて治療を行う。治療の手順は，病人を川のほとりに連れて行き，「イ呪文」をセゲナボの葉に唱えてから葉で病人の身体をこすり，病人を川にもぐらせ，引き上げ，モマボに大きな穴を開けて水を注ぎ，再び「イ呪文」をモマボに唱えてから，モマボを病人の頭の上に帽子のように置いて壊し，病人のイ・ホーを取り戻す。

この治療を行っても治らない場合には，蒸気による治療を行う。イへ行って，モマボ，木の葉や皮，アリを取ってきて，それらを葉にくるんで，焼いた石の上にのせてから水を注ぎ，その蒸気を病人に浴びせる。この時の呪文は次のようである。

ya Ana io denamoso	イのアナ鳥よ，［病気を］飛ばせ
ya Ware io denamoso	イのサイ鳥よ，飛ばせ
kasia koa io denamoso	イのアリよ，飛ばせ
kui Hoyare io denamoso	イのハヤレ・サゴヤシよ，飛ばせ
Kagia Sia io denamoso	イのカギアシア・サゴヤシよ，飛ばせ

「イ・ウサネ」は，これらの治療を行っても回復しない場合の最後の治療方法である。病人をロングハウスに入れる前に，上記の蒸気による治療を外で行った後，病人をロングハウスの中央に運ぶ。

イ・ウサネでは，二人の未婚の男性が女性の衣装を付け，イ・カ（イの女性）と呼ばれる。儀礼は二人のイ・カと他の二人の男性の計四人によって行なわれる。イ・カは，女性が頭に被るベール状の樹皮布を被り，胸に何か詰めものをし，腰簑スカートをはき，女性が魚を捕るのに使用するアノゴと呼ばれる道具を持つ。まずロングハウスの外で，男性二人が並んで上記の呪文を唱えながらファレ太鼓を叩き，その後ろに二人のイ・カがジグザグに飛び跳ねながらついて行き，ロングハウスに入って炉の上の棚を一つずつ覗き，ロングハウスの中央に横たえられた病人のまわりをぐるぐる回って止まる。これが終わると，他の男性達が隊列を作って，太鼓を夜明けまで叩き続ける。

あるインフォーマントはイ・ウサネについてこう説明する。

「イ・ウサネを行う時に女装するのは，病人がイの女性に襲われて病気になったから，イにいる女性の格好をするのだ。女性は太鼓を叩くことができないので，男性が代わりに女装してこの治療儀礼を行う。イの女性は病人の近くにいて，人々がイ・ウサネを行うのを見て，自分が見つけられたことを悟り出ていく。そして，病人はよくなる。」

別のインフォーマントの説明によれば，かつて二人の女性がアノゴで魚を捕りに出かけ，それをこっそり見たイの霊が二人に病気を引き起こすも

とを与え，その二人の女性が帰ってきて人々に病気を広めたので，イ・ウサネでは二人が女装してアノゴをもつのだと言う。

別のインフォーマントは，アノゴは羽アリの巣を表していると言う。イには羽アリの巣があり，病人は羽アリの巣が喉にふさがって息がよくできないので，巣を壊せば病気がよくなると説明する。

6．アヤ儀礼とジェンダー

かつて行われていた「アヤ」という儀礼は，狩猟が不作になったり，コミュニティに病気が蔓延するなどの災厄が続くと行われた秘儀であり，女性は見ることを禁じられていた[四]。もしも，アヤを見てしまった女性は，直ちに殺されたという。そのため別名「禁忌の儀礼（ジャボ・ジャ・ハブ）」とも呼ばれる。

儀礼が行われる日には，狩に連れていく犬を「飼っている蝶」と呼び，性にまつわる言葉や侮蔑語など悪い言葉（エゲネ）を使用することは禁じられる。その言葉を言いそうになったら，代わりに「doga yabo kae raro（儀礼の絶対的な禁忌）」と言う。女性は男性のことを「犬」と呼ぶ。また，タバコを吸うときには煙を下に向けて吐かなければならない。

男性死者の小指の骨を死者の兄弟か息子が持ってきて[四]，サブリという名前の植物の根を紐代わりにして槍の先にくくり付ける。これは狩に持って行く。サブリの葉は弓の真ん中にしばり付ける。サブリは別名アメナ・モキミシブ（人にいろいろな物を与える）と呼ばれる。アメナ・モキミシブを付けた弓を温めるために炉の上に置いて出かける。さらに別のサブリの葉を家の入り口に刺しておく。これは，狩を終えて帰ってきてから，男性一人一人の口に噛ませるために使う。サブリは獲物を引きつける力を持っていると考えられている。アヤが終わった後も，サブリは所有者によって大事に保管される。

見張りの数人を残して，男性たちは儀礼の服装をして，サゴヤシのデンプンを入れて焼いた竹筒を持ってブッシュに出かける。ブッシュで食べる

ことが許されるのはサゴヤシのデンプンだけである。狩が終わって帰るまで，数日間をブッシュの中で過ごすことになる。出入りを女性に見られないように，男性の家の周りにはサゴヤシの葉で塀を作っておく。

ブッシュの中のボタモという名前の木が二本生えている所へ行き，木の周りの草を刈る。さまざまな獲物に見立てた木片や小石を用意する[24]。Y字型の枝を用意し，枝の先にボタモの葉を付け，これでボタモの木の幹を挟み，獲物を逃がさないための呪文を唱える。長老がまず唱え，他の男性はその後同じ言葉を繰り返す。まず一緒に暮らしている女性達全員の名前を一つ一つ挙げ，川上を見ながらこう唱える。

「女性の名前，kemagu kete（考えるのをやめろ）」

女性の名前を全部言い終わるとY字型の枝を地面に落とし，別のY字型の枝でもう一本のボタモの木の幹を挟んで，川下を見ながら獲物の名前を一つ一つ挙げて，こう唱える。

「獲物の動物の名前，kemagu koso（心を変えよ）」

次に全員でボタモの木の幹を手で揺すりながら，次の文句を唱える。

「waruru segamo hura」

この言葉は，他の時には決して口にしてはならない言葉であるという。この時，ボタモの木の葉が全部落ちれば，たくさんの獲物が捕れることの証しである。

そして，見張りの年長者を除いて，それぞれ葉の散った方角に狩に出かける。他の男性の後を追ったり，見に行くことは禁じられ，もし禁忌を犯せば殺される。獲物が捕れると，ボタモの木の所に戻ってくる。全員が戻ると，焼いたサゴヤシのデンプンを全員で「アー」といって一斉に口にいれる。そして，小指の骨をつけた槍を持った死者の親族が先頭に立ち，一番後ろの男性は竹の葉を持って隊列を作り，ボタモの木の周りを回って行進し，帰ってくる。

家の入り口で，サブリの葉の所有者が，葉を一人一人の口に噛ませる。小指の骨を付けた槍を，死者の親族が骨を下にして持ち，床の上を引きず

るようにして家の中を歩く。他の男性達はその後に続く。アメナ・モキミシブをつけた弓を炉の上から降ろし，樹皮布を敷いた床の上に置く。各自が自分が捕ってきた獲物を，槍に付けた小指の骨とアメナ・モキミシブに触れさせる。これは，次の狩の時に獲物が良くとれるようにするためであるという。また，その他斧や槍，弓矢などの自分の所有物を持ってきて小指の骨とアメナ・モキミシブに接触させる。

この日持ち帰った獲物は，男性だけが食べることができる。女性に見られないように家の中の炉で料理する。獲物を焼くときには，女性達に悟られないように「樹皮布が焼けた」などと言う。他の村からも男性達がやってきて，肉を土産に持ち帰る。数日後に，女性達のために再び狩に出かける。これを「カ・ヌア・フォラブ（女性が膝を壊す）」と呼ぶ。この時捕らえた獲物は女性だけが食べることができる。もしこの獲物を男性が食べると膝を痛める病気になると考えられているからである。

女性達は，儀礼の表舞台では排除されているが，裏舞台に参加している。男性達が獲物を料理している時，女性の家では，何人かの女性が男性が儀礼の時身につける格好をし，男性のまねをして道化じみた振る舞いをする。太鼓を叩き，槍を持ち，祭礼で男性がうたう歌をまねしたり，性的冗談を言う。例えば，ケサネ（細長い白い実）を持って，「これはペニスだ」と言って皆を笑わせる。女性達は，夫にするように男装の女性に料理したサゴヤシのデンプンを渡し，「禁忌とされているシリの木でとれるフガ（甲虫の幼虫）を食べる？」「禁忌とされているカ・ヘビを食べる？」と冗談を言う。こうした行為は，ふだんは決して行なわれることはない。これらの行為は，裏舞台とはいえ儀礼の一部分を成している。

なぜ男性死者の指の骨を儀礼で使うのかについて，あるインフォーマントは，死者の霊が獲物を呼び寄せてくれるからだと説明する（第3節参照）。また，男性の骨しか使わないのは，骨は男性から作られるからだと言う。ボタモの木のまわりで儀礼を行う理由は，ボタモの木は，切ると獲物の血のような樹液が出るからだと説明される。

7．考察

フォイでは，女性は病気をもたらすと考えられているためロングハウスへの立ち入りは禁じられ，月経中と産後は月経小屋に隔離され，出作り小屋では川下に女性の寝床が作られる。こうしたデータからは，一見，従来の議論で言われてきたように，フォイでも女性はケガレているとされている，ケガレは女性にアプリオリに内在していると考えられている，と説明できるかのように思われる。しかし，フォイのデータの中には，それでは説明できない点が出てくる。確かに，経血や胎盤，産血は病をもたらすものであり，注意して扱われなくてはならない。しかし，それらは男性ばかりではなく女性にとっても，さらに月経中の当人や出産する当人にとっても危険なものであると説明される点に留意すべきである。従来の議論では，女性という存在そのものがケガレているから，そのケガレは女性には何の影響も与えないが，男性にとっては生命を脅かす危険なものとされてきた。しかし，フォイの説明では，経血・産血は女性自身にとっても危険なものであり，自分の経血にも触れないように注意し，母親は付着した赤ん坊の産血を洗い流すまで赤ん坊に直接触れることはしない。自分の経血に誤って触れてしまったために死んでしまった女性の事例は注目に値する。

これらの点は，従来の議論を見直す契機を与えてくれるものと思われる。従来の議論で論じられているように，ケガレが女性に内在しているのであるならば，そのケガレに女性も影響されるということは説明できない。ケガレと女性の身体とを同一視することができないとすれば，何が危険なものなのであろうか。フォイの場合には，経血も産血も，子供を作るのに使われなかった血であるから危険であると説明される。すなわち，生命の元となるべき血が何も生み出さなかったのは，それが悪い血であったからだ，その悪い血が経血や産血だ，と解釈されているのである。女性にケガレが内在しているのではなく，生命の誕生に結びつかない血（経血や産血）が危険であると認識されているのである。

それでは，月経中ではない女性がロングハウスへの立ち入りを禁じら

れ，出作り小屋では川下に寝なくてはならないのはなぜであろうか。それは，性交によって女性の身体の中には精液と女性の性液が混じりあったサブスタンスがあり，それが蒸気となって病気をもたらすから，男性の寝ている場所を歩いたり，風上にいるべきではないと説明される[23]。精液それ自身は病気をもたらすことはないが，女性の性液と混じることによって危険なものとなる。男性も性交によって，男性の重要な仕事である畑作り，狩，ロングハウスやカヌー作り，祭礼，財貨の獲得，戦いなどを失敗させる，災いをもたらす存在になる，と見なされている。性交をした男女の影響を受けるのは，病人や赤ん坊などとされているが，ここでも影響を受けるのは男性と特定されていない点に着目すべきである。

フォイの生殖観念では，神話によっても明らかなように，母親の血から子供の血と肉が，父親の精液から子供の骨や歯が形成される。女性の性液の役割は必ずしも明確ではないが，性交によって女性の性液と精液が混じり合い，子宮内で女性の血液と混じり合って新たな生命を生み出すと考えられている。これらの混合物が生命を生成するのか，それとも生成せずに終わってしまうのか，女性の身体内の曖昧な状態にあるサブスタンスが危険であると見なされていると解釈できる。すなわち，フォイの観念では，性交による男女の体液の結合は生命を生み出す一方で，死に至らしめるような危険な力を持つと考えられているのである。

パプアニューギニアで広く見られる男女の生活空間の分離は，従来女性のケガレという観念からのみ論じられてきたが，フォイの事例をより広い視角から考察すると，生と死，方位，儀礼の象徴といった複雑な事象が関連した「ジェンダーと空間」の相関関係，すなわちフォイのコスモロジーが浮かび上がってくる。

フォイの観念では，人は母親の体内から頭から生まれるゆえに，死に際して頭は川上に置かれなければならない。イ・ホーは子供が生まれる時のように頭から抜け出るとされ，ナメゲ・ホーは死霊の住む川下へと下っていく。川下側は女の出入口と呼ばれ，治療儀礼「クイ・ウサネ」で使用さ

れた女のボトが飾られている。女性と川下との関連は，女性の体内から発する蒸気が病をもたらすから川下（風下）に置かれるという説明にとどまらない，生と死にまつわる象徴的・観念的な事象である。

さらに，治療儀礼とアヤ儀礼の中には，男女の相補性という観念が見いだされる。女性は儀礼の中で象徴的に表れ，また実際に儀礼の遂行の一部を担っている。クイ・ウサネでは，男性と女性のボト二つずつを使用し，女性もロングハウスに入って儀礼に参加する。イ・ウサネでは，男性二人が女装して，他の男性二人と共に病人を治療する。アヤでは，呪文の中で女性の名前を一人一人唱える。アヤは男性の秘儀であるが，一方で女性は男装してふだんは禁じられた冗談を言い，儀礼の別の舞台を演じる。これらの儀礼の中には，男女双方の力で災厄を払いのけようとする観念が表象されている。ジェンダーの相補性と男女の結束により生み出される肯定的な力への信仰が象徴的に表れていると言える。また，アヤでは男性死者の骨を用い，祖先の霊の力を借りて災厄を除こうとする。そこには男性と女性，生者と死者の力を合わせて災難を乗り越えようとする観念が見いだされる。

このように，フォイの人々は，男女の性的・象徴的結合が持つある種の力に対する観念を持っていると解釈できる。すなわち，性的結合による男女の分泌液の混合は，生命を生み出すと同時に死に至らしめる力を持ち，儀礼における男女の象徴的結束は死や災厄を払いのける力を持つという観念である。生と死をめぐる観念がジェンダーやセクシュアリティと絡み合ってフォイのコスモロジーを形成していると言える。

ロングハウスの男性と女性の入り口，川上の男性空間と川下の女性空間，男のボトと女のボト，男太鼓と女太鼓，日常の仕事の役割分担，儀礼・祭礼における男女の役割分担，日常的な歌と儀礼・祭礼の歌に見られる男女の相互補完性［槌谷1987］など，ジェンダーはさまざまな次元でフォイの日常的・観念的世界の構成要素として織り込まれており，ジェンダーはフォイのコスモロジーを理解する上で，重要な鍵となっている。

註

(1) フォイ族の人口は4801人（1990年センサス）で，居住する地域から三つの下位集団に区分される。現地では相互に「クトゥブ湖の人々」「高地の人々」「フォイの人々」と呼んでいる。筆者の調査対象は「フォイの人々」，一般的には「低地フォイ」と呼ばれるムビ川下流に居住する集団である。以下，フォイと記述するが，データは全て低地フォイの７つのロングハウス・コミュニティで収集したものである。現地調査はパプアニューギニア政府と州政府の関係機関の許可を得て，1992年７月から1994年５月，1995年６月から９月，1996年１月から４月まで延べ２９ヶ月間実施した。第一回目の調査はアジア・オセアニア財団研究助成金，第三回目の調査はトヨタ財団研究助成金の財政的援助を受けた。調査地では，人々の多大な援助と協力を受けた。調査を可能にして下さった関係諸機関と，特に，長時間に渡って辛抱強く話しをして下さった現地の方々に心から感謝の意を表したい。

(2) 「高地の人々」，一般的には「高地フォイ」と呼ばれる集団で調査を行ったWeinerの記述によれば，妊娠は精液（男性の液体状の脂肪），経血，膣の分泌液（女性の液体状の脂肪）によって成り，女性の液体状の脂肪は小さなお椀のような形で精液を包み，子宮内に移動する。それらは，１０～３０回性交することで子宮口を塞いで経血が流出するのを防ぐのに十分なほどになり，月経は止まる。子宮内に充満した経血は，精液を包んでいる女性の脂肪に穴を開け，その結果，精液を核としてその回りを経血が覆い，さらにその回りを女性の脂肪が覆うことによって胎児が形成され始めるとフォイでは考えられている［Weiner 1988:50］。筆者はこの点を訊ねてみたが，このように明確に３つの分泌液の状態を認識しているインフォーマントはいなかった。ただ，女性の性液と血液，男性の精液によって子供が作られるという情報を得られただけである。

(3) 女性がロングハウスに入ることが出来るのは，葬礼，祭礼など特別な機会だけである。

(4) 現在，一つの家屋に寝る夫婦もいるが，この場合も男女の空間は壁で隔てられ

ている。伝統的には，共同住居内部を壁で男性と女性の空間に分離する形式の家屋で暮らしていた。

(5) フォイ語は，四つの方角を示す言葉を持つ。上あるいは北（フサ），下あるいは南（カシア），川上あるいは西（コロボ），川下あるいは東（タアボ）である。これらは，必ずしも正確な東西南北には対応しない。

(6) イ・ホーは眠っている間に目から抜け出して空を飛び回り，その時イ・ホーが見る光景が夢だと言われる。人が死ぬ時には，まずイ・ホーが抜けでて，その後まもなく死ぬと考えられている。

(7) 槌谷［1997］参照。

(8) 現在ではキリスト教の影響により，聖地が西にあるので西を見る方向（頭が川下，足が川上）に埋葬されるため，葬礼でも遺体がロングハウスにその方角に置かれることがある。また，霊魂は天に召されるというキリスト教の観念とナメゲ・ホーは海岸へ行くという観念が混在している。

(9) 月経の期間について「今日月経小屋に入ったら明後日に出る」と言われ，実際の観察でも月経小屋にいるのは３～４日間であった。月経の周期について，インフォーマントはこう語っている。「期間は知らないけれど，サゴヤシのデンプンを４回作ると月経が来る。サゴヤシのデンプンは約１週間でなくなるので４週間だと思う」。フォイでは雨季と乾季を区別する以外に，月日を数える習慣がなかった。

(10) 男の子を出産すると１１日間，女の子を出産すると９日間月経小屋にいるべきだとされる。フォイのカウンティング・システムでは，身体の部位を使って数を数える。９に相当するのが肘で，１１は肩に相当する。女性は物を運ぶとき，肘を折ってその内側に乗せて運び，男性は木材や大きな獲物などを肩に乗せて運ぶためである，と説明されている。実際にこの期間で悪露が終わるかどうかは疑問であるが，Weinerも同じ情報を記述している［Weiner 1988：51］。

(11) この神話にはいくつかのバージョンがある。別のバージョンでは，若い男女のキョウダイが二人で暮らしていたがまだ性器を持っていなかった。ここに記述された話と同じ方法で性器を得て，キョウダイは性交をして，われわれも白人

もできた，というものである。隣接するファス族もよく似た神話を持っている（栗田［1987］参照）。

(12) 母親のキョウダイの怒りによって病気になると，母親のキョウダイの怒りをとくために病人の父親は財貨を贈与する。母親のキョウダイに「アメナ・ホー（男性の霊魂）呪文」，別名「アメナ・キギ（男性の骨）呪文」を唱えて自分の服の断片で身体をふいてもらい，その布に火をつけて，病人に煙を浴びせる。さらに，母親のキョウダイに病人の指の骨を引っ張ってもらう。あるいは，呪文をセゲナボの葉かボタモの葉に唱え，それで病人の身体をこする。「アメナ・ホー呪文」では，祖先の名前を次々に呼んで，祖霊に病気を治してくれるようにと頼む。また，母親のキョウダイのイ（行くことを禁じられたクランの土地）へ行って，木の葉や皮，木の根，落ち葉を取ってきて，焼いた石にのせて，水を注ぎ，その蒸気を浴びて治療する方法もある（6節参照）。「アメナ・ホー呪文」は次のようである。

「先祖の名前，*Noma'amo iyogora mofesama'ae! Yiya ugubida'ae. Soboye tayi tikoyoko!*」（ご先祖様，あなたがいらっしゃるならば，どうか病気を取り除いて下さい！我々はあなたの子供なのですから。どうか怒りをおさめて下さい！）

(13) 杉島［1987］参照。

(14) 槌谷［1997］参照。

(15) オーストラリア行政府のパトロールが定期的に行われるようになって以降，戦争は一応終息した。

(16) Weinerは，悪いサゴヤシ・デンプンを食べたり，サゴヤシから取れる甲虫の幼虫を食べ過ぎることによってなる病気である［Weiner 1988:76］，と記している。

(17) この呪文に限らずあらゆる治療のための呪文は，男性だけが唱えることができる。

(18) 最後に「クイ・ウサネ」が行われたのは推定で２５年～３０年ほど前のことである。

(19) 現在の祭礼ウサネでは必ずしも守られていない。

(20) 刺すのはサゴヤシの葉であると話すインフォーマントもいる。

(21) 以後，治療された病人と病人を看護した人とは，お互いに名前を呼ぶかわりに「イリ・カゴ」と呼び合う。

(22) アヤ儀礼もキリスト教の普及によって行われなくなった。

(23) キリスト教の導入によって土葬が行われるようになる以前は，風葬であった。

(24) 二本の木の棒を地面に立てて，その間に棒を渡し，模型を吊るすというインフォーマントもいれば，ただ地面に置くというインフォーマントもいた。

(25) 性経験のない女性はなぜロングハウスに出入りできないのかと質問すると，そうした女性もいずれ性交して精液が混じることになるからだという答が返ってきたが，明確な説明は聞けなかった。また，性行為を行うことのない閉経した未亡人もロングハウスへの出入りを禁じられているが，こうした点をどう解釈すべきかは今後の課題としたい。

参考文献

Buckley, T. and A. Gottlieb

1988 "A Critical Appraisal of Theories of Menstrual Symbolism" in *Blood Magic: The Anthropology of Menstruation,* T. Buckley and A. Gottlieb eds., Berkeley and Los Angeles:University of California Press, pp.3-50.

Faithern, E.

1975 "The concept of pollution among the Kafe of the Papua New Guinea Highlands." in *Toward an Anthropology of Women*, R. Reiter ed., New York: Monthly Review Press, pp.127-140.

栗田博之

1987 「性の報告書ーパプアニューギニア，ファス族編」宮田登・松園万亀雄編『文化人類学４：性と文化表象』アカデミア出版，71-83頁。

Langness, L. L.

1967 "Sexual antagonism in the New Guinea Highlands: a Bena Bena example" *Oceania* 37:161-77.

Meggitt, M. J.

1964 "Male-Female Relationships in the Highlands of Australian New Guinea" *American Anthropologist* 66(4):204-224.

Meigs, A. S.

1978 "A Papuan Perspective on Pollution" *Man* 13:304-318.

1984 *Food, sex, and pollution: A New Guinea Religion.* New Brunswick, N. J.: Rutger University Press.

1990 "Multiple Gender Ideologies and Statuses" in *Beyond the Second Sex: New Directions in the Anthropology of Gender*, P. R. Sandy and R. G. Goodenough eds., Philadelphia: University of Pennsylvania Press, pp.101-112.

Sillitoe, P.

1979 "Man-Eating Women: Fears of Sexual Pollution in the Papua New Guinea Highlands." *Journal of the Polynesian Society* 86:77-97.

杉島敬志

1987 「精液の容器としての男性身体ー精液をめぐるニューギニアの民俗的知識」宮田登・松園万亀雄編『文化人類学４：性と文化表象』アカデミア出版，84-107頁。

槌谷智子

1997 「パプアニューギニア・フォイ族の歌」『国立音楽大学研究紀要』31集,101-114頁。

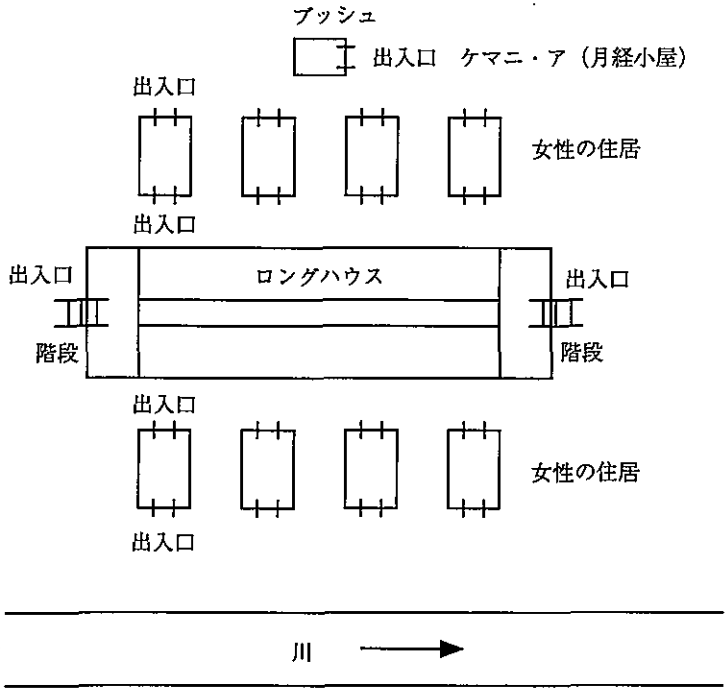
Weiner, J.

1988 *The Heart of the Pearl Shell: the Mythological Dimension of Foi Sociality.* Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

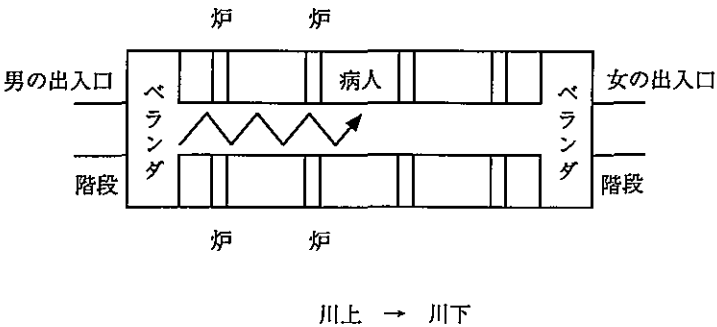
Williams, F. E.

1940-41 "Natives of Lake Kutubu, Papua" *Oceania* 11(2): 121-157; 11(3): 259-294; 11(4): 374-401; 12(1)49-74; 12(2): 134-154.

〈図1〉ロングハウス・コミュニティ

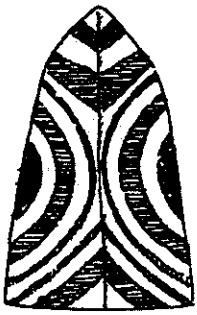


〈図2〉クイ・ウサネ

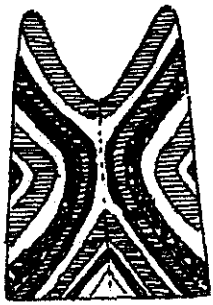


〈図3〉ボ　ト

バ　　ル

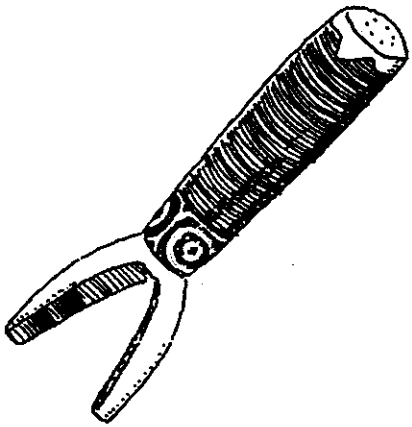


アゴテゲ

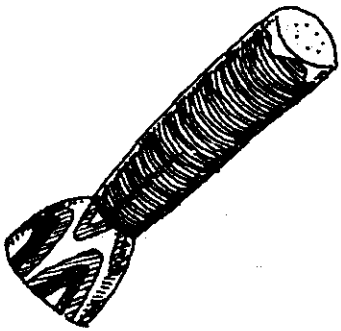


〈図4〉太　鼓

ファレ



ドエブ



Gender and Cosmology:
Sexuality, Space and Ritual among the Foi, Papua New Guinea

<Summary>

Tomoko Tsuchiya

The notion that women are polluted and dangerous to men is widespread among New Guinean Societies. Women are excluded from men's activities for fear that women's pollution might cause illness and death for men. Women's pollution is often explained to originate from women's bodily substance, especially menstrual blood and birth fluid. This is why women are secluded from daily activities during menstruation and childbirth. It is widely acknowledged among anthropologists that the notion of women's bodily pollution is key to understanding male-female relations in New Guinea.

A different account of women's pollution was obtained during my field research among the Foi-speaking people in the Southern Highlands Province of Papua New Guinea. According to some Foi informants, menstrual blood is dangerous not only to men, but also to women themselves. Women are, therefore, told to dispose carefully of their menstrual blood and birth fluid, (another form of menstrual blood) in order to prevent both men and women from being polluted.

The Foi theory of procreation is quite similar to that found in many New Guinean societies. It states that two substances are necessary for the formation of an embryo in the mother's womb: the mother's blood, that is, her menstrual blood, and the father's semen. According to Foi informants, menstrual blood during menstruation is dangerous, because it is not used for the reproduction of life. Semen itself is not dangerous, but when it is mixed with menstrual blood and does not stay in the womb, it becomes very harmful for the same reason as stated above. Men and women must

not, therefore, approach weak persons, such as babies and sick persons, just after they have sexual intercourse.

As these data show, the Foi notion of pollution which is based on gender is related to the Foi cosmology of life and death. To consider gender-cosmology relations among the Foi, I describe the following in some detail; (1) sexual division of labour and space; (2) various women's taboo during menstruation and childbirth; (3) the theory of procreation based on the origin myth of both sexes; (4) the taboo after sexual intercourse; (5) gender symbolism in rituals (*kui usane, i usane* and *aya*). In the final analysis of these data, it is shown that their cooperation is necessary to reproduce life (sexual intercourse) and to take diseases and misfortunes away (rituals) , though it sometimes leads to the destruction of life (pollution). In conclusion, I argue that it is necessary for Foi men and women to cooperate to produce supernatural power in ritual context.